42

『重訂解体新書』所引の中国書籍の研究（医書について）

陶　恵　寧

大槻玄沢が『重訂解体新書』を翻訳する時、西洋医学の専門用語の解釈を補完するために、大量の中国書籍を引用したことを既に報告した。引用した医書についての考察を『重訂解体新書』所引中国書籍研究の第三報として報告する。大槻玄沢が引用した医書は次の通りである。

1.『内経』（『黄帝内経』、紀元前四七五～紀元前二二一年ごろ）　中国現存最初の医学書で、中国医学の土台となる。大槻玄沢が『内経』の論述を引用して、神経液・胆・脳・腎などの解剖と機能を説明した。

2.『甲乙経』（『針灸甲乙経』紀元二五六～二八二年）　皇甫謐が著した現存する最も早期の針灸専門書である。五六二年呉人知聡によって日本に伝えられ、日本鍼灸の原点となる。

3.『本草衍義』（一一一六年）　寇宗奭が『補注神農本草』の誤りを訂正し、不足を補完し、著した本草専門書である。大槻玄沢が寇氏の論述を引用して、扁桃を説明した。

4.『素問玄機原病式』（一一八二年）　劉完素が『黄帝内経』の発病機序（病機十九条）を分析した医書である。大槻玄沢が劉氏の「玄府」の論述を引用して汗孔を説明した。

5.『危氏得効方』（一三三七年）　危亦林が五代にわたる家伝方を含め、それまでの処方を分類・整理し編集した処方専門書で、整骨に関する内容は豊富である。後年、華岡青洲が参考としたものである。

6.『黄庭経』（一五八三年）　梁丘子が注釈した臓腑に関する医書である。

7.『万病回春』（一五八七年）　龔廷賢が自らの経験と伝承の臨床経験をまとめた総合的な医書である。江戸中期の日本で盛んに読まれる。

8.『本草綱目』（一五九〇～一五九六年）　李時珍が三十年間かけて、八〇〇種類以上の書籍を参考し、完成させ

た生薬（漢方薬）の巨著である。万暦年間、日本に伝えた。大槻玄沢が李氏の論述を引用して、頭脳の解剖を説明した。

9.『証治準繩』（一六〇二～一六〇八年）　王肯堂が雑病、類方、傷寒、瘍医、幼科、女科など六科の弁証と治療をまとめた専門書である。大槻玄沢が王氏の記載を引用し、口腔の解剖を説明した。

10.『外科啓玄』（一六〇四年）　申拱宸が外科疾患の診断治療を論述した外科専門書である。

11.『壽世保元』（一六一五年）　龔廷賢がまとめた総合的な医書である。日本に刻本がある。

12.『普渡慈航』（一六三二年）　龔廷賢が撰述した総合的な医書である。

13.『医学原始』（一六八八年）　王宏翰が『黄帝内経』、『難経』及び歴代医家の論述と洋学とを結びつけて、人体の生理を改めて解釈した医書である。

14.『本草備要』（一六九四年）　汪昂が『本草綱目』を要約し、撰述した明解な薬物実用書である。大槻玄沢が記憶を説明するとき、汪氏の記載を引用した。

15.『釈骨』（一七三六～一七九五年間）　沈彤が著した中医解剖専門書である。『内経』と『甲乙経』に記載の骨格を翻訳・考証・解釈し、古人の誤った記述を訂正した。一八五〇年、日本に写本が出る。大槻玄沢が沈氏の論述を引用して、骨数を説明した。

その他、大槻玄沢が肛門を説明するとき、朱震亨・孫一圭（奎）の論述を引用したが、具体的な書名は記載してなかった。

以上、まとめると、『重訂解体新書』に引用された中国医書は計十七種類に及んでいることが判明した。大槻玄沢の翻訳に対する謹厳さもここからわかる。

（順天堂大学医学部医史学研究室）